

11 人魚

「ああ 美しい娘さん 君はどこに住んでいるの  
そんなに気ままで澆刺<sup>はつらつ</sup>として  
魅惑的な面差しに  
どうしようもなく惹かれてしまうよ」

「わたしの住むのは つりがね草も咲かぬところ 5  
小川も流れぬところ  
天の風も吹かぬところ  
さあ どこだか見つけてみせて」

「黄昏の中 妖しく見えるのは 10  
ただ君の奔放さと魔性のせい  
君はシダの丘の娘  
男が近づくことは許されない

なのにすっかり恋に落ちてしまったよ  
こんな気持ちは初めてだ  
君の薔薇の頬に 15  
珊瑚の唇に 一度でいいから口づけを」

「あなたのような若者にいじわるなんて  
誰もしたくはありません  
でも もしもわたしの唇を奪ったら 20  
あなたの命は長くない

すぐにこの寂しい丘から立ち去って  
また来ようなどと思っはなりません  
わたしは山の泉の乙女  
朝露とともに現れるのです」

「たとえ君が水晶の泉の乙女でも 25  
あるいはシダの丘の娘でも  
一度でいいから 優しい口づけを  
どうか嫌とはいわないで

美しさとは 朝露に怯える  
雛菊の胸当てのよう  
でもすぐに花開いてその胸元をみせるもの  
君の運命も同じこと」

30

「口づけならば手だけにしてね  
それでも汚れを悔やみませ  
男の息がかかるだけで肌色は曇り  
純潔には戻れぬのです

35

情熱とは山の<sup>いただき</sup>頂で燃える  
大きな炎のよう  
やがては白い灰へと燃え尽きるもの  
あなたの運命も同じこと」

40

— — — —

「お母さん お母さん 床を延べてください  
やわらかく 心地よい床を  
冷たい露で私の頭をぬらしてください  
ひどく頭が痛むのです

冷たく青い泉に私を沈めてください  
この胸の炎が鎮まるように  
あの寂しい茂みのそばに私を横たえてください  
希望などもう潰えてしまった

45

ただ独り<sup>さまよ</sup>彷徨う内  
行ってはならぬ場所へ行き  
夕暮れの森の中  
見てはならぬものを見ました

50

ああ 墓より恐ろしい情熱は  
すべての人を滅ぼし尽くす  
山の泉の乙女が  
私を破滅へと誘うのです」

55

— — — —

百年以上の時が過ぎ  
事の次第を知るものはもういない

男の墓は向こうの岸辺で  
鬱蒼とした木々に覆われている 60

そこで近ごろ かの乙女を見た  
ちょうど日が沈むころ  
黄金<sup>きん</sup>の髪を編みつつ  
歌を口ずさんでいた

人魚の歌

眠れ 愛しい人よ 静かに眠れ 65  
悲しみの夜は長いけれど  
深い山の泉の乙女が  
夜が明ければ あなたに会いにゆこう

でも 朝はいつ来るのかしら  
わたしの真<sup>まこと</sup>の恋人が目覚める朝は 70  
いつまた会えるかしら 清らかに自由になって  
荒野のシダの中

あなたの墓は低く寂しく  
枕元に通うのは蛆虫ばかり  
あの美しい紅い唇はどこへいったの 75  
柳の下で口づけしてくれたあの唇は

取り返しのつかぬ  
人の愚行の全てを思えば  
この嘆きの歌の最中<sup>さなか</sup>でさえも  
どうにも 笑わずにはいられない 80

眠れ 愛しい人よ 静かに眠れ  
希望がはまだその眠りを守ってくれる  
たとえ崖の下で眠る<sup>としつき</sup>年月が  
そこの石の数を越えようとも

たとえ月が静かに満ち欠けし 85  
休むことない時の翼にのって季節が移ろうとも  
それでも 空には一つの霊が残り  
あなたの朽ちゆく身から離れない

泉の底の宮殿へ

わたしは留まるのです 90  
この儚きものの世界へ  
わたしの戻る日は まだ遠い

他の霊たちはすでに深き淵を去り  
永<sup>なが</sup>の別れを告げてしまったのだから  
眠れ 愛しい人よ 静かに眠れ 95  
あなたの夜は もうすぐ明ける

わたしの愛しい水面<sup>みなも</sup>が  
暮れゆく日をもはや映さず  
灰色の荒れ地<sup>らいちよう</sup>から雷鳥が  
青い夜明けに朝を告げなくなる時 100

人魚はあなたの墓の上で泣くでしょう  
恨み言なんて口にせず  
眠れ 愛しい人よ 静かに眠れ  
朝までどうぞ安らかに

(鎌田明子訳)